

ア」「フム」「日のうちは、なんの事もないが、日が暮れるとなア世間が、シーンとする」「當りまへやがな、日が暮れて世間が賑やかなと、寝られんがな」「イエ、あの家の裏手が寺の墓原や」「墓原、俺好きや閑靜で宜い」「ア、さようか、宵の内はなんの事もないが、十二時が廻るとな― どころもなしに、ミチ〜と家鳴りがするのや」「ソラ、大工が建てしなに逆木をつかいよつたんや」「フム何を言ふてもこたゑん人やな― すると、何處で撞出す鐘か、陰に籠つてポーンと鳴る」「當り前やがな、鐘やよつてポーンと鳴るのや、太鼓ならドンと鳴る、別に不思議はないがな」「ア、さよか……スルト椽側をば、濡草鞋を履いて歩くように、ジタ、ジタ、と音がする」「ソラ、ど狸やシヨムナイ、ほて〜んごを仕やがる、フム捕へて、狸汁にして喰て仕舞へ」「狸汁……スルト椽側の雨戸が勝手にスウ〜ツト開きます」「そりや便利が宜い」「へエー」「へエーツて、さうやがな、能う考へて見い、俺のやうな無性者が、夜中に小便に行くのに、戸を開ける世話がいらん、勝手に戸を開けて呉れる斯なん好い事はない」「スルトなア、血腥さい風がフウツと吹込んで来るのや」「ハ、ア何處ぞ近所に魚屋でもあるのやろ、兎角魚屋の近所はイヤな臭ひがするものやが、そんな事位ひ別に差支へはないがな」「ソウスルト、陰火がポウツト見へるのや、スルトこの位の火の玉がコロ〜コロと轉こんで来るのんや」「フム、幾つほど」「幾つほど……、そりや一つやがな」「一ツやて、そりや淋しい、せめて三つ位い欲しいな」「へへツ、三つあつたら何うしなはる」「一ツはランプのかわり

に天井へ吊つて置く、一ツは火鉢へ入れて鐵瓶をのせて置くと、何時も湯が沸いてるやろ、一ツは炬燵へ入れる」「マルデ炭團やがな、そんな事を言ふてなはるが、其の火の玉が、ボンと割れるとなア」「フム」「其の中から、片ツ方の目が脹塞がつて、片ツ方の目が吊り上つて、目や口からドロ〜と血を流した、瘡衰ろへた奴がニユツト」「妙な顔をするなへ、それはなんや」「何んやて、これを見て分りまへんか、幽霊が出るのだす」「何ぢやて、幽霊が出る、俺幽霊好きや、其の幽霊は、男か女か」「サア、それが男なら凄うは無いのやが、女子の幽霊やよつて、なほ凄いのや」「ハ、ア、女子の幽霊か、そりや結構やな、實は俺、やもめや、女の幽霊なら、丁度好い、幽霊前が好かつたら、嬢にする」「エ、嬢にするて、幽霊を……」「ソウや、幽霊の附け物、氣に入つた、今日から借るよつて、家主にソウ言ふといて、家賃を滞こらんやうに、何んやつたら、先家賃に仕てもらうやうに、もし一遍でも滞うつたら、俺は氣が短かいよつて、直ぐに石油をかけて火を點けるで、何分頼のむで、さよなら」「コレ、オイ、チョツト待ちんか、サアゑらい奴が來やがつた、あの口振りでは、今日から宿替へ仕て來るで」「源さん」「よう、喜イやんか、マア這入り」「何うや、また何んを忘れて行たか」「慾張つてるなア、却々お前、忘れて行くどころか、ゑらい事やがなア」「どうした」「どうの、こののと言ふて、何しろえら奴が來よつたで、何を言ふても、こたへんのぢや、それで到當仕舞には幽霊をば、嬢にするといふやないか、どうも私も困つたで」「へエーツ、そして夫れが何うなつたんや」「何う